

Samuel Laing と漱石、寅彦

石原幸男

「漱石山房記念館開館1周年 松岡・半藤家資料受贈記念特別展」¹⁾ に漱石旧蔵書 "Modern Science and Modern Thought" という洋書が展示されていた。表題どおり、最近半藤家から寄贈された資料の一部ということで、漱石が英国留学中の1902年に購入したものらしい。漱石自身による書き込みと見られる筆跡もある。

ところで、これより2年後の1904年には、アインシュタインが『特殊相対性理論』を発表している。その後の一般相対性理論や量子力学の発展により20世紀の科学（物理学）は大きく変貌した。その直前の Modern Science とはどのようなものなのか、見てみたいと思った。

特別展では、同書の最初の1ページが展示されていた。読んでみると、古代ギリシャなどの素朴な宇宙観が述べられているが、これだけでは全容は到底把握できない。ただ陳列の説明によれば、著者は **Samuel Laing** , 刊行は1885年で、漱石蔵書はその1902年刊行の廉価版とのことである。

それで帰宅してから Wikipedia でこの著者名を検索してみた。すると「スヴォルドの海戦」という記事の「関連文献」の項目に次のものが見つかった。

Snorri Sturluson (translated by **Samuel Laing** and Rasmus Bjorn Anderson) (1907). Heimskringla: A History of the Norse Kings. London: Norroena Society.

つまり、"Heimskringla" という古代スκανジナビア(Norse)の王族の歴史書の英訳者であるらしい。さらに"Heimskringla" について手繰ってみると、その英訳書の刊行は1844年で、先の "Modern Science and Modern Thought" より41年も古い。したがって両者の Samuel Laing が同一人物であるかどうかはわからない。そもそも、古代スκανジナビアの王族の歴史と Modern Science とはちょっと結びつきそうに思えない。

しかしながら、「スヴォルドの海戦」の記事には寺田寅彦『春寒』が引用されている。

王が代わりに自分の弓を与えたのを引き絞ってみて「弱い弱い、大王の弓にはあまり弱い」と言って弓を投げ捨て、剣と盾とを取って勇ましく戦った。（寺田寅彦随筆『春寒』より）

それで『春寒』を読んでみると、冒頭に

スκανジナヴィアの遠い昔の物語が、アイスランド人の口碑に残って伝えられたのを、十二世紀の終わりにスノルレ・スツール・ラソンという人が書きつづった記録が Heimskringla という書物になって伝えられている。その一部が英訳されているのをおもしろそうだと思って買って来たまま、しばらく手を触れないで打っちゃっておいた。とある。間違いなくこの Heimskringla の英訳本を寅彦は読んでいたのである。ただそれは「おもしろそうだと思って買って来た」というだけで、その訳者の名前も、ましてや漱石蔵書との関連も書かれてはいない。

以上からわかったことは、Samuel Laing という人物がスκανジナヴィアの Heimskringla という書を英訳しており、これを寅彦が読んでいたこと、また少なくとも

も同名の人物による "Modern Science and Modern Thought" という書があり、それは漱石が蔵していたこと、これだけである。両者には何の関連もないのかもしれない。

ただ、ひとつ引っかけることがある。岩波文庫寺田寅彦随筆集第一巻では、『春寒』の次に『春六題』が載せられており、その冒頭には相対性理論に関する記述がある。漱石蔵書の直後に大変貌を遂げた Modern Science に関する記述である。それは

近ごろ、アインシュタインの研究によって力学が根底から打ちこわされた、というような話が世界じゅうで持てはやされている。これがこういう場合にお定まりであるようにいろいろ誤解され訛伝されている。

という前置きから始まって、

一般化された相対論はとにかくとして、等速運動に関するいわゆる特別論などはあまりにわかりきった事であるためにわかりにくいと言われうるかもしれない。それはガリレー以来、力学が始まってこのかただれも考えつかなかったほどわかりきった事であったのである。ここでアインシュタインが出て来てコロンバスの卵の殻をつぶしてデスクの上に立てた。

だれにでもわかるものでなければそれは科学ではないだろう。

と結ばれている。相対論に関する寅彦の見解を披歴したもので、世間に流布する誤った見解を一刀両断している。

ところで、『春寒』は大正十年一月、『春六題』は同年四月に発表されている。ほぼ同じ時期と言える。然れば、スカンジナビアの物語を読んでいる間にも、寅彦の脳裏には相対論があったのではなかろうか。ちょうどその耳には長女が弾くメンデルスゾーン『春の歌』が響いていたように。

また『春寒』には、

美しい天気であったのが、戦が始まると空と太陽が赤くなって、戦の終わるころには夜のように暗くなったと伝えられている。天文学者の計算によると日食はなかったはずだということである。

という記述があるが、少し前の1919（大正八）年には、皆既日食時の観測で「光が重力によって曲がる」という一般相対論の予言が実証されている。ここで日食に言及しているのはこれが念頭にあったのではなかろうか。

つまり、寅彦のこれら2編は相対論という共通項で繋がるのであり、そしてその背景には漱石蔵書"Modern Science..." があるのではなかろうかと筆者には思えるのであるが、いかがなものであろうか。

1) 新宿区立漱石山房記念館（2018年9月22日～11月22日）、<http://soseki-museum.jp>